

こどものみらいフォーラム「映画と語る家族のかたち、育つチカラ」

- 1 日時 平成21年10月25日 午後3時15分～
- 2 場所 ビッグパレットふくしま Bホール
- 3 出演者 モデレーター：渡邊竜一
パネリスト：家田莊子、宮脇 理、服部 敦、生田目京子、廣木隆一

渡邊竜一モデレーター： 皆さん、こんにちは。「こどものみらい映画祭」もこれが最後のプログラムになりました。無事に期間を過ごしてきました、最後にこの映画祭を締めるイベントになります。お付き合いの方よろしくお願い致します。

私、自己紹介をさせて頂こうと思いますが、これまで「じゃらん」ですとか「ゼクシィ」ですとか雑誌の編集に携わりながら、観光の町づくりという形で全国を回って来ました。その中で映画を使った地域の活性化と言うことで、色んな形で関わらせて頂いて、この映画祭もそうです。5年程前から富山で映画祭をやっておりまして、その中で市民の皆様参加型で作っていったのが、今年公開になりました『劔岳 点の記』でして、そういう企画を成立させて皆で、映画で元気にしていこうという活動をさせて頂いております。

今日はですね、テーマが「映画と語る家族のかたち、育つチカラ」とこと教育に関しまして私は専門外でして、皆さん登壇されている方々は各領域でご活躍されている方でございますので、皆さんの意見を引き出す係りとして進行役に勤めさせて頂きたいと思っております。よろしくお願い致します。

それでは、今日は大きく3つのテーマで進めていきたいと思っております。

まず1つ目としては、「家族のかたち」というテーマなんですね。専門家の立場として、宮脇先生に口火を切って頂きたいと思っております。お願い致します。

宮脇 理さん： ただ今紹介に預かりました宮脇でございます。先程まで廣木監督のワールドに浸っておりました。ふと気がつくと、「家族のかたち」の現実には焦点が移ったという感じです。

私も改めて家族ということを知ると本当に躊躇してしまうのですが、いま、「家族のかたち」について問われて、咄嗟に応えられるのは「家族のかたち」にイメージされるのは二点、「家族の絆」と、そ

の「絆」がいつ切れるかもしれないかと言う不安と怖さです。そして映画に連動して改めて「どんな記憶がありますか」「それについてあなたが関心を持った映画には何がありますか」と聞かれると、私はやっぱり二つの映画を思い出します。一つは“DVD”にもたくさん揃えられているご存知、山田洋次さんの『家族』(1970)、二つ目は、それとは表わし方は違うようですが、同じ山田洋次さんの『男はつらいよ』48篇のすべてにわたるコンセプトです。ここに共通点があるんです。それは家族が直面している問題に「家族の絆」と、その「絆がいつ切れるかもしれない?と云う不安と怖さ」です。端的に申せば、現実の複雑な世の中で予想のつかぬ出来事に遭遇して、果たして「家族の絆」は維持できるのかと云う問いですね。初めの『家族』の方は1970年の作品ですから今から39年前、大阪万博の頃が設定されています。長く引っ張るのは無理ですが、その頃から日本は不景気へと旋回し……、炭鉱が閉鎖されてくる。『家族』の主演者：井川比佐志さんだっと思いますが、この方が家族を引き連れて閉鎖された炭鉱の町から広島を経て、徐々に北海道の知人を頼って行くと言うロードムービーですね。広島では弟さんの所に寄るんですが部屋が狭くてここには世話にはなれない!。笠智衆演じるお父さんを連れて大阪に出てくるわけです。大阪では日本が好景気に支えられている時の万博が対照的に描かれ、自分たちの「家族」と華やかな万博が相対化され、「家族」の非力がフォーカスされます。その通過地点を経て東京にやって来るのですが、東京では子どもを亡くしてしまうのです。最悪の事態。井川さん扮するお父さんが万策尽きながらも、友人を頼って、東北をさかのぼって北海道の開拓地にやっと辿り着く。ここからは未来があるのだろうかというところで幕が下りるんです。でも幕の下りる直前、笠智衆演じるお父さんが亡くなってしまいます。私は何時までもその風景が頭の中に焼き付いています。そういう不慮の事態の想定は誰にもわからない。家族の絆のぎりぎりのところはどこまでなのか?。映画って凄いなと思うのは、そういうものを私達に強烈に訴求させるのです。映画はご存知のように光と影、それが反射光の中で私達に訴えて呉れる。これほど優れた媒体は無いと思うのです。

もう一つの『男はつらいよ』に通底するのは、フーテンの寅さんの生き方の不安な気持ち、これは皆さんがご覧になって色々な見方や評価があると思いますが、やはり同じポリシーが張られた山田洋次さんの映画だだと思います。時間が限られていますから端折りますが、それはフーテンの寅がどこに行っても、もう一度東京に帰りたい!。柴又に帰りたい!。だけどまた出て行くことになる。何か私たちの周辺の家族のあ

りように酷似していないでしょうか？。かつて、この国にも現在と同じような切実さはありませんでしたが、「自由と平等」の建前が分母にあっての格差、別離は、格差社会が当たり前の昔とは人々の置かれている思い込み状況が違います。居たいところに居られない、「家族の絆」は離れていく……。この繰り返しを『男はつらいよ』48篇のすべてが提示して呉れています。

やはり今の日本の社会・世間の中で生き抜いていくには、映画媒体の訴求力が「家族のかたち」を育てる方法の一つ、優れた方法ではないかと思うのです。それは透過光を基調としたテレビ媒体ではなく、反射光を暗い中で観る時の映画媒体の優位性ではないでしょうか。

渡邊竜一^{レター}： ありがとうございます。

『男はつらいよ』をそう言った目で見たことがないんですけれども、時代に合わせてあの中に出てくる台詞なんかも48作のなかですごく厳選してきているってこともあるんだろうけど、今後改めて見る機会があったらそういう目で見てみたいと思います。

それでは服部先生にお聞きしたいんですけれども、服部先生は工学博士でいらっしゃるながらもいろんな町づくりに関わられておられますけど、そう言ったコミュニティの中における「家族のかたち」と言うことでもしよろしければご意見をよろしくお願いします。

服部 敦さん： 紹介頂きました服部です。全国色々な所で町づくりに関わっているんですけれども、最近町づくりにあたってコミュニティの話が出たんですが、やっぱり地域の中での人の繋がりはどんどん希薄になってきているんじゃないかとよく指摘されます。特に地域の繋がりの中が壊れてきている原因に、家族の繋がりが壊れてきていることと指摘があります。それについて最近、日本の住宅のあり方・住まいのあり方が家族のあり方を壊しているんじゃないか...と言う珍説を最近唱えています。皆さんご存知だと思いますが、3LDK・4DKとか住宅家屋を買ったり広告を見たりあると思います。あの3LDK・4DKとかああいうLDKという住宅のあり方は日本以外ないんです。日本しかないんです。わずか戦後5、60年の間に発展してきた日本独自の住宅の作り方なんです。日本の住宅はそれまで室町時代に原型が生まれて600年間まったく変わってなかったんです。戦後にゴロツと変わってきちゃったんです。どう変わってきたのか今日お話をさせて頂きます。

昔の住宅っていうのは畳が敷いてあって襖と障子で仕切ってあった住宅だったんです。書院造って言うんです。こういう住宅だとどこで生活していても隣の部屋の音が聞こえる。そこに一緒に住んでいる人の気

配を感じられるというのが昔の住宅です。人の気配を感じるし外で起きている物音や風とか光とかそういうのがなんとなく障子とか襖を通して入ってくる。一緒に住んでいる人達の気配を感じる。という事が出来たんです。場合によっては隣で聞いちゃいけないことも起こったりするんですが、分かっちゃいるんだけど聞いているのに聞いていないフリをする。そんな中で自分と家族というのを見出していく。家族を通して自分と自然、自分と地域というものを見出していくことをやってきた。さっきの映画でもソーシャルスキルという言葉が出ていましたが、人間が段々社会に出て行くにあたって個人がいて家族がいて地域に出て行く。こういう緩やかな繋がりを昔の住宅は持っていたんです。戦後 LDK が発達してきて、これは日本の住宅政策にあったんですけど、そうすると個人主義と機能主義、みんな個の確立をしなくてはいけない。みんな一緒に出ていてはいけない。みんな個室に行きなさい。それぞれお父さんはここ、お父さんとお母さんの寝室はここ、あなたはここ、食べる所はここ、と決められちゃたんですね。間の壁をデジット硬い壁で囲われる。そうすると隣の部屋で何をしているか分からない。家族が何をしているか分からない。最近の住宅は奥のほうにリビングがあって前に個室があって玄関がある形が多いんです。家族との繋がりが一切なしに外に出て行っちゃう、出て行くことが出来るようになっちゃう。とすることで住宅の作り方そのものが家族の繋がりを壊しているのではないのか。最近よく思うところであります。4LDK・3LDK とか LDK は一度壊していかないといけないじゃないか、かなり最近強く思っています。そういう形で個人がいきなり個室、家族や地域の繋がりを得ないままに個室って所でずっと育たなくてはいけない。色々な繋がりがないままに個室の中で育てなくてはいけないという事が起こっていく。最近はいきなりネット社会、インターネットがありますね。携帯電話とか。家族とのコミュニケーションがないままに携帯電話やインターネットでいきなり個人と不特定多数の人が繋がっていく世の中が出てきている。昔のように家族・地域また社会と関わっていくことに対して、固執している個人がいきなり携帯電話やインターネットで社会に繋がるということが起きている。こういう中で家族のあり方をもう一回問い直さないといけないですね。その核に住宅の作り方もあるんじゃないかというのを地域で色々な活動をしているんです。これは一つの問題提起として提起させて頂いて、この後お話をさせて頂きたいと思います。以上です。

渡邊竜一^{レター}： ありがとうございます。

お話を聞きして確かにそうだなと。その昔の映画を見ても襖も

なければ障子もない。ずっと映画の中に映っている家の形もそうだったなという気がします。なんかある一定の時代からすごく個・個と言うんですかね、個室というのがフォーカスされているようなところ、それから社会との繋がりがってというのがとっても参考になりました。すごく面白かったです。

では、現場でのご意見ということで、永らく幼稚園・保育園等で勤務されて現在もご活躍されている生田目さん、現場でのご意見ということでお願いします。

生田目京子さん： 保育連絡会から参りました生田目京子です。よろしくお願ひ致します。本当に現場の事しか分からなくて申し訳ないんですが、よろしくお願ひ致します。

私が住んでいる鮫川村っていうのは人口 4200 人程の少子高齢化の進んだ典型的な過疎の村です。そんな村にも村営住宅っていうのがありまして、今年度も新たに 8 棟建設されております。そこにはもちろん村外とか県外から来ている人も入っているのですが、村内に大きな家、田舎ですからもちろん家は大きいんですけど、そんな大きな家があるにもかかわらず、そこに若い夫婦が入っているっていうのが結構あります。次男とか三男とかじゃなくて長男でも両親とは別に世帯を持つということで村営の住宅に入る人達が増えております。

核家族が増えるということでは生活パターンはそれ程都会と変わらなくなってきているかなと思っています。夜遅くまで起きていて朝起きられないで朝食抜きで保育園に登園するような子も増えてきています。先日村が発行している広報誌に、現在保育園にお子さんを預けているお母さんの手記が載っていたのですが、数年前まで太平洋側のいわき市に住んでいて、年老いた曾祖母が気になって鮫川に戻って来たというんですが、そのお父さんお母さんも共稼ぎでお祖父ちゃんお祖母ちゃんも共稼ぎってことで、生まれた子供は曾祖父母に見て頂いたそうです。でも寝ている間 6 ヶ月ぐらいまでの間は大きいお祖父ちゃんお祖母ちゃんでも見ていられるんですが、動き出すとどうしても大きいお祖父ちゃんお祖母ちゃんでは見ていられなくて、子供センターに私が勤めている保育園なんですけどそこに入所してきました。10 年程前くらいまでは、お祖父ちゃんお祖母ちゃんが農業とかをしながら小さい子供を田畑に連れて行って看たりが出来たんですが、今はお祖父ちゃんお祖母ちゃんの年齢も若くなって両親・祖父母共に共稼ぎが多くなってきて、小さいけれど保育園に預けてっていうのが多くなっています。4200 人程の小さな村なんですけど年々 0~1,2 歳の子供の人数が多くなり、今はもう 0 歳児で

3人程の待機児がいるというのが現状です。

渡邊竜一ライター： 今、お話の中で核家族増がよく言われていることですが、これが増えてくると今のお話にもありましたけど、親もまだ子供の内に色々な事をしなきゃいけない。親が子供にいろんな事を教える能力がないうちに色々な事をしなきゃならないんだらうなと思ったりします。この後の「育つチカラ」のテーマの時にも詳しくお聞きしたいんですけども、じゃあ廣木監督にお聞きしたいと思います。

これまで様々な作品を作られていると思うんですけど、先程の『きみの友だち』それから『余命一ヶ月の花嫁』含めて色々な作品の中で家族の形が描かれていると思うんですけども、そういった作品を演出されている立場から「家族のカタチ」について触れて頂けるとありがたいんですが。

廣木隆一さん： こんにちは廣木隆一です。すごく緊張するのは何故かと考えていたら、僕は本当にそっちで育っていて、今ここで僕が喋っていることがすごく不思議な体験をしていて凄く緊張していますけど。

映画の中で家族っていうのはすごく基本だと思っています。家族を描くことは一番難しいことだとも思っていますね。ホームドラマっていうか、親がいて子供がいてっていうのが、常にそれぞれの登場人物にしても必ずバックに家族がいるわけで、いつもその登場人物はどんな家庭に育ってどんな暮らしをしてっていうことから発想して脚本を作る、練り上げていく作業だし。ホームドラマ、家族を描くってことはすごく難しいことでまだ僕は出来てないんですけど。

渡邊竜一ライター： あれですよね、映画を作るってドラマがないと出来ないじゃないですか。そのドラマティックさをいわゆる家族って体現していると思うんですけども、これまでの作品の中で例えばそれぞれの家族のキャラクターをたたせるために何かご苦労されたりとか演出上何か気に掛けていることとかありますか。

廣木隆一さん： そうですね。演出する場合って親の立場だったり親の事情だったりを描く場合もあるし、子供の立場・子供の事情だけを描く時もあるんですけど、それはもう僕は役者さんに問いかけることが一番多いですね。例えば「親にどういう風に叱られた？その時、どういう風に思った？」っていうことを本人に問いかけるしかなくて、逆に聞き出した分「俺は親に怒られた時にこう思ったよ」とっていうようなことを役者さんに言う。逆に今度は親の方を演出する時に「子供を叱るときどう叱りたいですか？どういう風に注意したらその裏にある優しい気持ちとかが生まれてくるんでしょうかね？」って。それは本当に人それぞれだし、役者さ

んは役者さんで色々な環境・色々な家庭の中で育ってきたことも兼ね合わせて創造して登場人物を作り上げていくって言うのが一番多い作業ですね。

渡邊竜一ライター：　なんかだかあれですよ、映画ってずっとそこに張ってあるポスターなんかを見ても思うんですけど、「家族のカタチ」を映画の中で考えるととっても時代を映しているような気がします。今監督がおっしゃった、監督が強制的に演出するよりは役者さんの反応を聞きながら答えを聞いて、おそらく最初に撮られた役者さんの反応と今の若者の役者さんの反応って違うんじゃないですか。

廣木隆一さん：　全然違いますね。僕らが育った時を絶対にお手本にしないで、今その今を昔の話だろうが今出ている人達の気持ちを大切にしていかないと、やっぱり映画ってずっと一緒になっちゃうんで、新しいものも見えてこないことだと思うんですがね。

渡邊竜一ライター：　とてもこの後の話に繋がりそうなんです。じゃあ、家田さんにお聞きします。

緻密な取材活動で定評のある家田さんですけども、これまでの幅広い活動の中でこのテーマ「家族のカタチ」についてご意見を伺いたいのですけど。

家田 荘子さん：　私は駆け出しの頃から今に至るまでずっとティーンズの取材をし続けてきています。女性ばかり取材してきて思うんですが、特に一年間女の子の少年院に行って取材をしてきました。毎週通って、女の子達に色々な話を聞いたり、それから行事に参加して一緒に泣いたり笑ったりして色々な事を教えてもらったりしてきたんですけど、そういう少年院に入っている子達もそれから少年院に入っていないごく身近にいるティーンズの子達もよく似ているなと思うんですけど、その少年院の中で凄く勉強させられた事がありました。目からウロコの事がありました。大体皆さん半年から2年半ぐらい少年院に入っていて、酷い犯罪だと殺人まであって、小さいところだと万引き常習犯とか家出常習などもあるんですけども、最後に一人一人卒園の日が違っていきまして、卒園式っていうのがあって、そしてみんなに見送られてそれから園長先生の部屋に行きます。そこで身元を引き受ける家族と少女と一緒にお話をするんですけど、私が同席させていただいた中でその当時の園長先生がよく言われたことは「親にどういう子供だと思われているって思っていた？」と質問されていました。子供達の多くは「愛されていないと思っていた」と言います。「いない子供だと思われていると思っていた」親はビックリします。父親なんかこういう時弱くなって泣いちゃったりします。「そんな子

供を愛さない親がいるなんて、愛しているの当たり前じゃないか。こんなに心配しているのに」と言うんですけど、子供にはその愛情が伝わっていない。親は一生懸命愛情を注いでいるつもりでも、でも子供は愛されているとは思っていない。私もそうでした。小さい時、小学生の時にイジメられておりました、それで親がいつも我慢しなさいって強くなることを教え続けてきました。それが子供の時に理解できなくて誰にも話が出来ないまで、一人で耐えて頑張って友達もいない状態で育ってきました。ですから、親が多分、今だったら分かるんですけど、私のことをとっても愛していたと思うんですが。あの時は知らない子だと私も思っておりました。それで今考えるのは、もしかしたら親の考える愛情の伝え方と子供の願っている愛情の伝えられ方との間にすれ違いがある、ギャップがあるんじゃないかなとそういう風に感じます。過剰に子供を愛する若い世代の親が増えてきましたけども、でもその愛情も伝わってないんじゃないかなと思うんです。私は娘が一人おります。それでちょうど今二十歳です。ただ何回も離婚・結婚を繰り返してりおまして、二度目の夫の時の子供なんですけども、外国人の夫ですから5歳の時に離れてからずっと元夫が彼女を育てておりました。それで私は日本に居ながら出来る限りのことをしてきました。ただ元夫も何度も離婚・結婚を繰り返しておまして、私の娘にはいつもお母さんがいるっていう状態だったので、あまり領域を侵さないようにそれでも一生懸命やってきたつもりでした。でも、彼女が16歳の時に電話で「マミーは私のこと愛してないの？」って言うてきました。ビックリしました。こんなに一生懸命やっているのになんで？って思って、震える声で「どうして？」って聞いたら、「私の友達を見ていると学校に行って帰ってくるだけの何時間か離れているだけの間なのに、帰ってくるとお帰りって言ってハグして抱きしめてそしてキスをチュチュチュして、もうアイラブユー・アイラブユーって言うている」私が、娘がですけど、成田に来ると「マミーはお帰りって言って抱きしめてキスもしてくれるけど、友達のお母さんみたいにはやってくれない。だから愛していないの？愛情がたらない」って言うんです。もう本当にビックリしまして、私は母親から殴る蹴る怒鳴る閉じ込めるで厳しく育てられてきたので、余計に「愛している。愛している。」と言われたことは無かったんですけども、私は正直に「日本はハグしてアイラブユー・アイラブユーってやるそういう習慣があんまりないのよ。でもそのハグしてアイラブユー・アイラブユーの回数とかキスの回数であなたが愛情を計るんだったら、私もいっぱい愛しているからそうするよ」と言ったら「なんだ。アメリカと日本の文化

の違いか。分かった分かったもういいよ。」と言って大きなギャップをつくらないで済んだんですけども、もしかしたらそういうギャップをつくっている家族がいるかも知れないのかなと思います。

渡邊竜一氏レター： 今日のテーマがこの後、「家族のカタチ」の後「育つチカラ」ということ。それから最後に「映画のチカラ」という流れで行こうかと今考えていますが。最初の「家族のカタチ」というところで余りにもお話がออกมาして、ちょっと私もどういふストーリーを立てようか戸惑っているぐらいなんですけども、今のお話の中で出てきたのはその時代に伴っての家族の編成、これはよく言われる核家族社会そういう話もあるんですけども、それからいわゆる箱と言うかハードによるその仕組みの中での「家族のカタチ」、それからそれを演出する客観的な目、更に言うと家田さんがおっしゃっていたのは国際的な話もあると思うんですけど、様々な「家族のカタチ」というものが今お話の中でありました。そういった今の時代形成や今の状況を見た上で次のテーマの「育つチカラ」というところにお話いきたいなと思うんですけども、ご覧になっている方もいるかもしれませんが、今回の映画祭の上映作品の一つで『里山っこたち』という映画を上映しています。これは千葉県の木更津の方にあります保育所で実際にやっている保育の一つなんですけど、自然の中で触れ合いながらあまり大人が手を掛けずにですね、それこそ転びながらケンカしながらぶつかりながらっていうのをずっと捉えたドキュメンタリー映画です。なかなか都会の子供達なんかはそういった体験がなくなっている中で、ただそれをカメラが追っているだけといえただけなんですけれども、非常に考えさせられる内容になっております。こんな話を聞いた上でですね、是非まず現場からお話を聞きたいなと思うんですけども、子供の「育つチカラ」を現場でどんな時に感じるか、時代の編成も含めてですね今の子供達も含めてお話頂ければと思います。

生田目京子さん： 先程言ったように、核家族化が進んでいるということもありまして月曜日に来た時に「日曜日に何をして遊んだの？」って聞くと「買い物に行ってきた」とか「ゲームセンターに行ってきた」とか言う子が結構多いんですね。親さんのレジャーがそのまま子供の遊びになってしまっているというのが今結構多いような気がするんです。私の住んでいる鮫川村は本当に緑豊かな村で、それなのに毎日自然と向き合って生活しているって子が少なくなっているんじゃないかなって思っています。それがとっても残念です。どちらかと言うと保育園・幼稚園に来ている子の方が天気の良い日は「よし、散歩に行こう」と出掛けているので、自然に触れ合う機会が多いんじゃないかなって思っています。私自身生まれ育

ってそこに勤めているので、地域のことや散歩の場所が豊富だったりするので、結構毎日楽しんでいるんです。生活様式や生活の状況が変わっても自然の風景はそんなに変わっていないので、初夏は散歩に行って木苺やサクランボを食べたり、今ちょっと前にはアケビを食べたり、長年保育を受けている子なんかは私なんかよりも先に木の実を見つけて山によじ登って行ったり、私も結構意地悪なもんですから「食べたかったら自分で取りな」なんて言うと、結構子供なんかは向きになって木に登ったり、棒で叩いたりして取るんですね。そういうのって私自身ものすごく大切にしていきたいなと思っているんです。欲しかったら「はいどうぞ」と貰うよりは、何とかして自分で手に入れたいという気持ちが大切なんじゃないかなと非常に思っています。

あとですね、核家族ということで今ちょっと気になっているのは、言葉遣いが本当に荒い子が多いんですね。あと、ちょっとしたことですぐにキレルって言うんですが、今流行のキレル^{はやり}っていう態度になっちゃう子が多かったり、食事の時の姿勢が悪かったりとか、箸や鉛筆の持ち方が悪かったり、食事の時に肘を着いて食べたりするので「そういうのはいけないんだよ」「だってパパもやっているもん」とかって、親さんがそういう風なのを注意できないんですね。昔だったらお祖父ちゃんお祖母ちゃんが「それはいけないんだぞ」とかっていう感じで注意した部分で、今はお父さんお母さんがそういうところをしっかりと自分で意識しないと注意できないと言うか、そういう部分でも「育つチカラ」が不足しちゃうっていうのは、そういうところにはあるのかなって私自身は思っています。

渡邊竜一^{レター}： 今のお話で自然との触れ合いの中で例えば四季を感じてみたりとか、怪我をしながらとか辛い思いをして初めて痛みだったり良さが分かったりとかがきつとあったりする。実は私個人的なことなんですけど、津軽三味線の師範の息子でして、代々親の立ち居振る舞いとかを見て育つんですね。先代、先々代といるわけなんですけどやっぱり核家族化が進んで希薄になってくると、その「カッコいいな」という親の存在とかお祖父ちゃん存在とか中々身近に触れられなくなってくるんじゃないかなと今のお話を聞いて思いました。

宮脇さんにお聞きしたいんですけども、先生は確か『感性による教育』というようなご出版・著書もありますけれども、今ちょっと触れましたけれども、芸術とか造形に触れいくっていうのはある意味自然に触れていくことに通じるものがあると思うんですけども、そういったものを通じての子供の「育つチカラ」についてご意見をいただければと。

宮脇 理さん： 今こちらの先生がおっしゃったことはまさに現実の問題でして、私たちに迫ってきている事態だと思うんです。時間帯の差異を考えずにこれからお話しする挿話は、半世紀ぐらい前から今日(こんにち)に通底する子どもの活動って、実に存在感がそのまま出ているな！と云う、素朴な内容です。

実は私が一番最初に勤めたのが北海道教育大学、昔の学芸大学ですが、その頃、私は作家、モノを作り上げる仕事をしていたんですが、教育の世界に入ったきっかけが羽仁進さんが創った映画：『繪を描く子どもたち』(1956・昭和31)でした。羽仁(1928～)さんはご存じのように羽仁五郎さんの息子さんです。『繪を描く子どもたち』が発表された1956・昭和31年は、第二次大戦後10年経ったころです。映画の内容・時間軸を端的に云えば、同じ羽仁さんの「教室の子供たち」(1955)の姉妹篇です。一方、こちらは「児童画を理解するために」という傍題があるように、図画工作教育を通じて子どもたちの創造力をどのように伸ばすか、発展させるかを、前作同様の盗み撮りでとらえたパートカラーの半自作映画でした。ストーリーは、東京・江東区の小学校の一年生の教室にカメラを持込んで描いたもので、四月から二学期頃までを描いた今日で云う記録映画でした。現在のようにモノが有り余っている時代とは違って、しかもみんながどう生きてらいいのかという時代でした。当時は文化映画と云ってたんですが、初めて劇映画と併映されたものです。特筆されるのは『繪を描く子どもたち』のすごくワンパクでどうしようもないぐらいの子どもの「力」が、当時の日本人の心を揺らしたんですね。まだバラックのような建物、その時代に子ども達の生き生きとした姿が徹底的に描かれている。それを批評した評者の差異感が課題を残していると思うのです。例えば久保貞次郎さんと云う児童画の先生や、女優の高峰秀子さん、一般の方々は「頭に心を追いつかせるなんて素晴らしいことじゃないか」と絶賛しているわけです。ところが、すでに亡くなりましたけど物理学者の武谷三男さん(1911-2000)、この方が「いや、あれは素晴らしいんだけど、もう一つ芸術教育の方々が見落としているもの、見えないものがある。それは何かというと、いわゆる活力の裏には暴力だって入っているんだ。暴力という問題をどのように解決していくのが教育の一つの展開じゃないか」と私に云われたことを思い出します。この後、明治大学の大学院においでになった小野二郎(1929-88)さんが私に云ったこと……「そうなんです。美術教育の先生は子どものエネルギー、人間の活力は賞賛するけれども、実は武谷三男さんが云ったように、活力の裏には暴力という問題が潜んでいて、それ、暴力をど

のようにプラスの方向、つまり活力に変換させたらいいのか。こういう問題を解決しなくてはいけない」と。ですから、これは今に続く事だろうと思うんです。

渡邊竜一^{レター}： 今のお話を聞いていてすごく色々な面があるなと思ったのが、そのいわゆる芸術とか自然とか文化とかに触れるとある意味言い訳が利かなかったり、希望とか夢に向かって一つのエネルギー、力というものもあると思いますし、あと子供ってある程度思春期になってくると、自分の体と気持ちが追いつかない制御できないエネルギーみたいなものもあると思いますし、何か今の「暴力と活力をどう解決していくか」と言う言葉の中には色々なすごく深い言葉が含まれている。あとそれこそ戦後というところちょうど日本が復興してきて、すごく世界全体にエネルギーがあった時代なのかなという風にもお聞きしましたし、それがどう子供の「育つチカラ」というところに結びついているものかっていうのは、私も分からないですけども、いろんな内容をフォーカスすることがあるんじゃないかなという風に思いました。

ちょっと目線が変わるんですが、今日は映画祭の中での話しなんですけれども、映画の世界っていうのはですね、私も現場を何度か見たことがあるんですけども、正直言って非常に厳しいキツイ世界、苦しい世界なんですけど、とにかく現場の方々は生き生きとやる気を持ってモチベーションを持ってやっている。それから非常にスタッフを育てるじゃないですけど自然に学んでいく・育っていく現場があると思うんですけど、是非映画の世界の人を生かす人を育てるみたいな裏話を含めて、監督にお話をお聞きしたいと思うんですけど。

廣木隆一さん： そうですね。僕が現場に入った時のことを話すと、本当に怒られてばかりでした。昔は殴る人もいっぱいいたんですけど、今はそんな人はあまりいないんですけど。本当に怒られて、全然分からないことで怒られて、理不尽なことで凄く怒られて、でもそこでやれたっていうのは映画は何もないところから一つずつ作っていくもんで、出来た時の自分の興奮だったり感動だったりということが、きっと続けられたことなんだと思いますね。最近、若いスタッフなんかがいっぱい僕の組みにも来るんですけど、怒るんですよ。怒るとキョトンとされるんですね。「あれ？ どうしたのかな？」って無口になっちゃうんですよ。硬直しちゃって「ごめんなさいって一言言えばいいじゃん」って「すみませんでしたって一言言えばいいじゃん」って、逆に僕が怒る方の立場になったんですけど、怒れなくなっちゃっていて、だからさっきおっしゃったように昔は僕も本当に隣近所のおじちゃんおばちゃんに怒られて育ってきた。だから俺

は褒められて育ってなくてずっと怒られっぱなしで、なんか今でもつまらない映画を撮ると皆に怒られたりするんですけど、今はもう僕は言葉をかけると言うか声を掛けると言うか、それは怒っていても褒めていてもいいと思うんですけど、声を掛けるって事の基本になっていますね。現場でも基本的には声を出せて言うのが基本なんで、やっぱり声を掛けるということが基本かなと。

渡邊竜一^{レター}： 感じますか？怒りにくいし、怒られ慣れていないその辺を...

廣木隆一^{さん}： メチャメチャ感じていますね。次の日から来なかつたりしますからね。

渡邊竜一^{レター}： 私も見ていると、映画の世界って未だにビシビシと厳しい世界かなと思っただけですけども、映画の世界でもそういうのが大分あるんですね。

廣木隆一^{さん}： そうですね。最近終わるとすぐに帰っちゃいますよ。

渡邊竜一^{レター}： そうですか。

廣木隆一^{さん}： お酒も飲みに行かなくなりました。

渡邊竜一^{レター}： コミュニケーションがそこでも希薄になっているような気がしますね。

じゃあ、すみません。服部さん、今、設計が変わって、コンクリートの中に人が居るみたいな話がありますけど、これまでの活動の中にまさにそれを体現して活動をされている服部さんですけども、「育つチカラ」人が育つ周りの環境とか色々大切に思うんですけど、ご自身の活動の中で「育つチカラ」についてコメントをお願い致します。

服部 敦^{さん}： 「コンクリートの中に人が...」と話が出ましたけど、皆さんにさっきお話ししたように、戦後に住宅を沢山作らないといけないからといって合理的に作る為に、沢山作る中で合理的な作り方をして3LDK・4DKみたいな作り方を開発してね、そういうのを広げてきちゃったんですけど、どうもそろそろ反省しなくちゃいけない時期がきているな。それで個室に押し込められちゃった個人がいきなりネットとか携帯電話とかで不特定多数の社会と繋がって、むき出しの個人と社会、誰か分からない社会と繋がっている。そういう感じになっているっていうのは果たしてどうやったらいいのか。たぶん住宅の作り方自体を変えていかなくちゃいけないんじゃないかという風に思っているんですけど、経験からとお話があったんですけど、せっかく今日は映画祭なので、映画の話もちょっと、映画も観ているんだぞとみたいな、映画の話をしようかなと思っています。

まさにまだ公開している可能性があるんでネタバレしないように気をつけて喋りますが、『サマーウォーズ』と言うアニメ映画ですね。細田守監督の映画まだ公開されていると思うんですが。これは非常に今のお話につながる場所がありまして、余り細かいことを言うとネタバレし

ちゃうんですけど、仮想ネット社会、ミクシイみたいな仮想ネット社会の話なんです。仮想ネット社会で起こった事件がだんだん深刻化して現実の社会に影響をおよぼし、現実の社会が崩壊し始める。そういう映画なんです、すごくリアルな映画なんです。その仮想社会が混乱し始めるとですね、色んな人が不特定多数の無名の個人が関わっているんですが、無名の個人それぞれが「誰か助けてくれよ。誰か何とかしてくれよ」って声ばかり起こるんですよ。それがバァーッと広がっていくんですよ。誰も何ともしてくれない。その中で暴力だけが膨れ上がっていくという所で映画の危機が訪れるんですけど、そこを救っていくのがやっぱり家族の繋がりだったんです。大家族の繋がりがあるのを救っていくということに繋がっていくんです。ネットの中でむき出しの個人が個を確立できないで困っているところで、やっぱりリアルな家族の繋がりっていうのがあって、そこでもう一回家族の繋がりがあるみんな落ち込んでいくんですけど、一番良くないのは「とにかく一番良くない事は腹が減っていることよ」って言うすごくリアルな言葉が出てくるんですね。「とにかく家族と一緒に飯を食おう。無言でいいから飯を食おう。腹が減っていたらいけない」と言って、食卓を囲んで、ちゃぶ台を囲んで家族が一生懸命飯を食う。そこから知恵が湧いてくる。勇気が湧いてくる、思いが湧いてくる、というのでそのネットで起こった大きな事件を実はリアルな家族の力が解決していくっていうことを訴えている映画だと私は受け取ったんですけど、いろんな受け取り方が出来る映画で、まだ公開中なんでよかったですら皆さんに観て頂きたいと思うんですが、別に細田守監督の関係者とかなんでもないんですけど、そういう『サマーウォーズ』って映画がありましてですね。そういうところで、ネットにいきなり繋がってしまう今の社会に押し出されてしまって、ネットに直接繋がっている個人なんだけど、もう一回その家族の中にある自分というリアルなコミュニケーションっていうのをどうやってみようかがすごく重要になってくるんじゃないか。家族だけじゃないかもしれない、友達なのかもしれないですけど、リアルなコミュニケーションっていうのをどうやって獲得していくのか。そこでリアルなコミュニケーションがあって初めて今度はネットの中ですね、リアルなコミュニケーションに立ち向かうコアな人達がいると今度は有象無象のネットの中の人達が逆に力を持って、不特定多数の人がそれを押し上げていく勇気をくれるっていうネット社会の良さっていうのも訴えていますね。だからとかく家族の問題を論じるって言うと、ネットの話は悪いほうに向かいがちなんですけど、ネット社会から離れられない我々ですから、ネット社会の

中でもう一回リアルなコミュニケーションとバーチャルなコミュニケーションと結び付けていくのかって、かなり考えなくちゃいけないと思った時にそういう映画があってですね、非常に感銘を受けて今考えようとしているんです。その中でリアルなコミュニケーションの最も根幹として自分たちが毎日住んでいる住まいっていうのがあって、そこをもう一回皆さん問い直したらどうですか？って言うのを申し上げたい。4LDK・3DK とかって広告いっぱいあるけど、そういう住宅のあり方って高々30年・40年ですから、4LDK・3DK とかみたいな住宅じゃなくなってるっていいじゃないかと、いきなりでっかい大きな空間があって自分たちの好きなように障子や襖で仕切り直してみるっていう、もう一回そういうところから自分の生活空間というのを考え直さなくちゃいけないんじゃないかという、そこから先に家族それから地域それからネットの色んな人の繋がりっていうのが出てくるんじゃないかなっていう風に映画を機に考え始めているところで、まだ自分の中でリアル化していませんけど、そういうことをちゃんと考えないといけないなと思っています。

渡邊竜一^{レター}： 今のお話を聞いていて思ったのは、最近私の会社でも新人を二人採用したんですけど、会社の中で静かなんですね。カタカタとキーボードを打っている音が聞こえてくるんです。私なんかが入った時はまだコンピューターがまともになかったので、「まず電話しろ」って言われていたんですね。もしくは会いに行けと。多分インターネットとかメールとかっていうのはコミュニケーションを保管する手段だったと思うんですけど、今はそれが逆転しているような気がしてですね。そうすると何が起きるかと言うと、お客さんと何かトラブルが発生した時にメチャメチャ弱いんですよ。もう凄いことになっているわけですよ。でまたそれをメールでやろうとしているから止めどなく非が膨らんでいくようなことになっていて、まず会いに行きなさいと、それから顔を見せてコミュニケーションするか何か解決する手段があるだろうと、本当に思ったりすることがあって、今ちょっとお聞きしていたら思うな。家族とか他の人の目があるとどういう行動を取らないといけないかって見えてくるような気がします。

家田さんにもお聞きしたいんですけど、それこそ本当にこれまでの取材活動やそういう経験の中でも色々な方にお会いしていると思うんですけども、今その一連で皆さんがお話された「育つチカラ」のテーマのですね、さっきちょっと楽屋でお話した中で今のコミュニケーションに繋がるようなお話を是非聞かせて頂きたいと思います。

家田 莊子さん： お声かけとかコミュニケーションの話が出ましたけれども、今の子供達はとっても大人に気遣っていて賢くて、それで「これを言ったら大丈夫」とか「これを言ったらお母さんが心配しちゃう」とか振り分けていて、差し障りのない事だけを言っていることがとても多くて。例えばイジメられているとか摂食障害をしているとか色々な問題を抱えていても、これを言っちゃおうと親が心配しちゃうとか言わないでいる子供達が、独りで頑張っ解決しようとしている子供達が多くって、親は言ってくれるから大丈夫、良い関係だから大丈夫、うちの子は大丈夫って言って受身であると、いつまでも子供の問題が親に伝わらないことになってしまっ、ある日突然頑張りすぎた子供のストレスが爆発して、何か問題になってしまうことがあるんじゃないかと思うので、声を掛けるということがコミュニケーションをとることがとっても大切なんです、私もそうなんです、私は喋るよりも黙っているほうが得意なんです。今は喋っております。そんな私が感じることもありまして、私は修行の一つで四国歩き遍路をやっています。二泊三日で120キロ歩けるんですが、それで1400キロ1周を繋げていくのを4周やっています。来週も行くんですが。その四国歩き遍路をやるにあたって私はコミュニケーションをとるのが苦手な私が決めたことは、挨拶をしようということでした。出会う人すれ違う人すべての人に挨拶をしよう決めて、1400キロをずっと歩いて行くんですが、挨拶をしてくれる町としてくれない町があります。挨拶をしてくれる町っていうのはどんな年齢の人も挨拶をしてくれます。そして子供でも大人でも後ろから自転車で追い越して行く人も挨拶をしてくれます。挨拶をしてくれる町っていうのはパワーがあって人の顔に笑みがあって明るくって社会も明るくって産業も発展しているように感じられます。挨拶をしてくれない町っていうのは暗くって怖くて不安を感じます。それぐらい違いがあって産業もダウンと沈んでいるように感じられます。どんな年齢でも挨拶が出来るとことは家でも学校でも社会でも挨拶教育をされている、そういう地域は素敵な地域だと思います。「おはよう」って言って「おはよう」と返ってくる。それを繰り返してやっているとその内に「今日は暑いね」ってもう一言言えるようになったり、更にもう一言言えるようになったりしていくと思います。今悩みがあって言えない大人がいっぱいいます。それからお子さんも例えば親から暴力を受けている。子供の場合はどんなに親から暴力を受けていても親に好かれないと思っていますし、親を売することは出来ません。だから人に言うことは無いと思います。それで独りで頑張っちゃっている子もいますし、イジメられている子供もいると思われまっ。

イジメられていることは恥ずかしいと私は思っていたので言えませんが、そういう子供もいるかと思います。でも、いつもいつも挨拶をしてくれるあの人だったら言ってみようかな？あの人だったら秘密を守ってくれるかな？って却って近くの人より遠くの人の方が話を聞いてもらいやすいつてもありますから、そういうコミュニケーションを取るための第一段階の手段として挨拶がとても良い方法じゃないかなと思っています。そして四国遍路で自然の中に私は無理やり入れてもらっています。普段生活していると人間中心で自然がその周りにあるように思えますが、自然の中に「ごめんなさい」と言って無理やり入れてもらって歩かせようと、不自由な事ばかりしています。大雨があったり、強風もあつたりします。そしてそんな歩いている時に空を見上げますと今度は空から人を見てみよう、生き物を見てみようという気持ちになってきます。雄大な空から見えますと、私も隣にいる猫も牛も草も花もみんな一緒に命があつて、そして空から見たら大きななんて関係なくてみんなちっぽけな物に見えるんだろうなと思えてくると、自分も人の命も大切にしなくちゃいけないって、動物の命も大切にしなくちゃいけないと言う自然体の気持ちで思えてきます。問題のある子供達を山に連れて行ったりすることもあります。引きこもりが山の気を頂いて治つたつていう子がいます。問題を抱えている大人や子供がいらしたら「一緒に行こうよ」つて言って自然の中に引っ張つて行くことも大切かなと思います。それで元氣をもらつてちょっと回復の力をもらつて頂けたらと思いますので、問題のある大人やお子さんが周りにいらつしゃつたら「行きなさいよ」ではなくて「一緒に行こうよ」つて言って自然の中に連れて行って頂けたら良いんじゃないかなと思います。

渡邊竜一^{レター}： ありがとうございます。今「家族のカタチ」それから「育つチカラ」とテーマでお話してきましたけれども、1部の方でご覧いただいた廣木監督の『きみの友だち』ですけれども、ちょっと見たばかりかもしれませんが改めてですね、これの一部映像をご覧になって頂ければと思います。

(映像が流れる)

渡邊竜一^{レター}： はい、これを本当に何度か見返すとですね、主人公の恵美、それに着いて行く友人に由香。由香の台詞を聞くと涙が出そうになるんですよ。監督にちょっとお聞きしたいなと思うんですけどね。えつとこの映画つて率直にですね、誰に観てもらいたいと思つて作られたのかなと思つて。

廣木隆一^{さん}： えつとですね。映画の中で色んな説明を省いているんですよ。だから

きっとその同年代の人達が見ると凄い退屈だなと思って、もうちょっと上の世代の僕、僕はずっと上の世代ですけど、本当に今子供がいたり位の人達に一番見て欲しいなって思いましたけどね。

渡邊竜一^{レター}： 多分、どんな年代の方々が見てもですね、自分の学生時代に思い当たるような経験とか、色んな立場でですね自分が言葉を投げかけて、強い言葉を投げかけてしまった立場かもしれないし、そう言うのを投げかけられた立場なのかもしれないし、いろんな立場で感じるものがとつてもあるような気がしました。

ここから是非、この話にも触れてになるんですけども、最後映画祭の中なので「映画の持つチカラ」って言うのを最後のテーマでお話をしていきたいなというふうに思います。

映画って色んな人に色んな影響を与えますし、色んな力を持っているというふうに思っています。冒頭で私がちょっと申しましたけれども、地方で映画祭をやるっていうのは大きな意味があって、『劔岳 点の記』という映画もですね、参加型で地元でもオーディションをやったりしてですね、最終的には地元の沢山の人が見る結果になった。そして大ヒットになるって映画もありましたし、映画ではないんですけども、例えばお隣の韓国の『冬のソナタ』みたいなものも、おそらく国を跨いで価値観も変えるほどのインパクトだったというふうに思います。そう言った、映画・映像の持つ力っていうものはとっても強いんじゃないかな...なんて思うんですけど、服部先生にちょっとお聞きしたいんですけども、町づくりをされていてですね、メディアっていうか映像の持っている力についてご意見を頂けたら...

服部 敦さん： 町づくりも全国色んな地域に行ってお応援しているんですけども、大抵皆良い事をやるんですよ。ここに地域に良い文化財があってこれを残していこうとか。福祉で高齢者の介護を皆でやろう。皆色んな形で繋がって町づくりをやっていくんですけども、課題が難しくなればなる程期間がかかる。長い時間かかってくるんですけども、長い時間やっている内にとつても良い事をやっていたんだけれども、だんだん皆出口の見えな仕事に疲れ果てて、だんだん一人抜け二人抜けいなくなっちゃうというような経験を過去何度もしてきているんです。やっぱり良い事であればある程長い時間かかって人を繋ぎ止めておくのはすごく難しいって時に、メディアの力って大きくなっていうふうに思っていて、良い事ですとどこかのテレビ局が聞きつけて新聞社が聞きつけて、たまたま取材をして大々的に特集番組でやってくれるとか、新聞の一面で取り上げてくれるとかっていう場面があるんです。やっぱりそういうのは一過性

ですね、その瞬間は嬉しかったり評判があったりするんですけども、だいたい三ヶ月もするとその効果が殆ど無くなってしまいうっていうのが一般的なんです。そうではなくて地域で行われている息の長い活動にちゃんと一緒になってその活動を外に発信し続けるメディアっていうのが必要なんじゃないかなとつくづく思って、それはどうやったら作っていけるのか？もちろんミニコミ誌とか地域FMとか色々な形のメディアがあるんですけども、やっぱり地域の情報をどうやって発信していくかが凄く大事だと思うんですね。そういう時は映像の力が非常に大きいので、活動そのものを映像としてちゃんと記録しながら外に発信していくっていうのがきっと重要だなと思っています。自分も今、私事ですが、沖縄の遥か沖合にある孤島の北大東島って人口 500 人しかいない島の町づくりというか島づくりを応援しているんですよ。そこでやっぱり子供達が太鼓をやっているんですね。太鼓はまとまった曲になっていないので、まとまった曲作りをして、ちゃんと訓練して皆に見てもらえるようにしたいなとたまたま話をしていたら、世界的な太鼓奏者の林英哲さんが協力してくれることになりまして、英哲さんと一緒に北大東島に行って、子供達の太鼓のスキルを上げて皆に見てもらえるような状態までもっていくという活動を今やっているんですが、その過程を最初の段階からずっと映像で記録して、たまさか良くなった時にポンッと大きなマスコミが来て、良くなった所だけを捉えていくっていうのは絶対に良くないので、最初の段階からちゃんと下手な時からですね、ちゃんと記録をしていって、たまさか入ってきたマスコミに対して本当の姿をちゃんとしたものを見てもらえるようにしていきたいなと思いました。そういう意味での映像での記録・映像での発信というのは地域の活動にとつてすごく重要だって思っています。

渡邊竜一^{レター}： ちょっと繋がるかどうか分からないんですが、家田さんにちょっとお聞きしたいと思ってですね。例えば色々社会で起きている事象をですね取材されて、それが文字として本になって、家田さんの場合それが映像化されて映画になるという経緯を辿られていると思うんですけども、その間そもそも作り手として文字を書かれた時とそれから映像化された時の違いなんかも含めて「映像のもつチカラ」良い点も悪い点も含めてコメントを頂けたらありがたいんですが。

家田 荘子 さん： はい。皆さんがよくご存知の『極妻』に関しては、あのお陰で私は恐い女だと思われてしまったんですね。恐くて強い女って男性に嫌われちゃうんですけども。私は確かに抗争の最中に山口組一和会の抗争の最中にヤクザの幹部宅に住み込んで取材をしましたが、私は恐い人間では

なくて怖い世界を取材しただけなのに、そのように捉えられてしまうのは...だからマスコミがテレビで、例えばワイドショーなどに私が出していただいた時に「強い事を言ってくれ」と言われるんですね。「これをナニナニしろとか否定とか叱ったりしてくれ」と言われても、私はそんなに叱ったりするタイプの人間ではないので、でもイメージがそうだからってどんどん作りあげられてしまうんですね。だから多分イメージと本当の私と正反対の状態になっているんじゃないかと思います。『極妻』に関して言いますと、『極妻』の1話は確かに私の原作を使ってくれましたが、2話からはアクション映画ということでどんどん独り歩き、覚悟はしていたんですが独り歩きしました。「あんな極妻はいない」と私はいつもプロデューサーに言い続けたんですね。「あの世界では女がしゃしゃり出たらおしまいだから、女の苦しみを書いてくれ」って言うんですけども「これはアクション映画だから割り切ってくれ」って言われて、「姉さん、出しゃばったらおしまい。もし現実にもこういう姉さんがいたらすぐに首を切られる」と言うんですけども、女性がライフルをぶっ放したりとかそんなようなところもありまして、それを割り切るのが随分大変で、何回も何回も言い続けましたが原作者の言葉はついに伝わらずずっときてしまいまして、16作最後の作品の時にやっと、監督が最初の頃はまだまだ下の方で働いてらっしゃったんですが、その監督がやっと姉さんの気持ちなどを入れて下さるようになったと思ったら、今度は制作される側が金銭的に苦しくなってもう作れない状態になってしまったんですけども、それぐらい差がありまして、『私を抱いてそしてキスして』エイズ患者さんの映画をしていただいた時は監督さん達といっぱい話し合って「こういう台詞は言えない」とかそういうことも加わらせてもらったんですけども、そうじゃない時はやっぱりまったく別の世界の映画っていうふうにごんごん独り歩きしてしまって、「これはもう原作者としてはもうしょうがないと諦めなくちゃいけない」と前々から言われていたんですけども、ちょっと悲しい部分もあります。

渡邊竜一^{レター}： すみません。今日は実はですね、こういった形でお話させて頂くにあたって、私も先入観として怖い方だと思っていました。すみません。

家田 莊子 さん： よく言われることです。

渡邊竜一^{レター}： それで実はちょっと調べまして、あるブログを見つけたんですけども、『極妻』を見てですね、「描き方が乱暴すぎるんじゃないか」とある女性が家田さんに直接お手紙を書いたと言うような事が書いてあって

...

家田 莊子 さん： そうなんですか。

渡邊竜一^{レター}： そうしたらですね、直筆の手紙が戻ってきて「原作をしっかりお読みになって下さい」という手紙が返ってきて、「反省したと共にえらく感動した」というエピソードを見まして「あっ、違うんだな」となんとなく思った次第です。やっぱり意図することって映画を作ることも大事だと思うんですけども、コミュニケーションの手段として何を伝えたいのかがすごく考えなきゃいけないと思うんですね。

監督にちょっとお聞きしたいんですけども、耳の痛い話かもしれないけれども、作り手として企画を持ち込まれたり、原作を持ち込まれたりした時にですね、どういった点を作り手として気を使われているとか、どうしてもプロデューサーの立場だと儲け主義になってくるのでしょうかないんですけども、作り手の監督のご意見を是非聞きたいなと思ってですね。

廣木隆一さん： 原作をやる場合は自分がその本に出会って感動したって事を映画で同じような事を表現出来ないかなっていうのが一番のことですね。

渡邊竜一^{レター}： 監督にお聞きしたのが間違いだと思います。監督は恐らくかなり作り手として原作を意識するって点でメッセージのある方なので、あまり商業主義の方ではないのであれでしたけれども。実際どうしても商業主義の方になってくるとですね、ビジネスですのでそっちの意図に流れていくのはしょうがないかなって思うんですけども、やっぱり最後は人の作る物なので先程以来のお話の中でコミュニケーションっていうのがとっても大事なかなって思ったりなんかします。

ちょっと話が変わるんですけど、教育現場でですね、アニメも含めて子供に見せる映像や映画っていうのがきっとあると思うんですけども、その時にその影響ってとっても大きいと思うんですよ。私も子供の頃にブルース・リーを見て「アチャー」ってやっていたくちですけども、見せる側として気を使われている事もしくは見て子供達がどんな影響を受けているかというのでご意見がありましたら。

生田目京子さん： はい。私に振られたらいったい何を話せばいいんだろうと迷っていたんですが、私が携わっている子供たちは0歳から5歳児までなんですが、小さい子2歳児位になりますと、テレビとかで何とかレンジャーとか何とかマンとか言うのを見ると殆どの子がそれになりきっちゃうんですよ。遊びなんかも何とかレンジャーごっこことかなると、ごっここと付くんですが本気で叩いたり取っ組み合いになっちゃうりするんですが、年齢が高くなってくると本当にごっこで出来るようになって、大きくなるとそういう何とかレンジャーもテレビの世界とか映画の世界とかがって風に分れる子が多くなってきているんですね。中にはもちろん

ん育ちが幼くって5歳児になっても「何とかマン」ってやっている子はいるんですが、でも大分そう言う意味では大きくなってくれば影響を受けなくなってくると思うんです。子供ってその映画を見たからこういう気持ちが育つとかってことではなくて、気持ちの中に残しておくっていうか、私が住んでいる鮫川はここから1時間半位かかるのですが、映画館とかもこの辺に来ないと無いんで中々触れる機会とかも無いんで、保育園なんかでは絵本とか紙芝居とかで出来るだけ良い物を、何を基準に良い物って聞かれるとちょっと困るんですが、その絵とかにしる言葉遣いにしる色々迷いながら選びながら子供達に与えています。大きくなった時に「あっ、もしかすると小さい時に読んでもらった絵本とか紙芝居の中と同じ様な事なのかな?」とかって言う様に重なる部分があれば良いのかなって私は思っているんです。私なんか映画を見て渡邊さんがおっしゃったように外に出るとすっかり主人公になって歩ききっちゃうタイプなんです、本当に何か場面に出くわした時に「あっ、こういう気持ちってあの映画と同じだよな」って思える部分があれば子供達に見せた価値っていうのが出てくると思うんです。だから出来るだけ本物、本物って言ったらアレなんです、気持ちの部分で精神的な面で成長出来る様な物を見せていきたいなって思っています。

渡邊竜一^{レター}： ありがとうございます。やっぱり映画ってこう色々な意味で影響が大きいですね。私も例えば監督なんかはよく感じてらっしゃると思うんですけれども、地方なんかで撮影をすることは大きなイベントなんですよね。映画自体が、ロケ自体がですね。服部さんと同じ様に私も町づくりに関わっているとですね、すごく感じるのが、晴れ舞台、ハレとケと言う言い方があると思うんですけれども。都会は毎日がハレなんですよ。なので、ケを求めて田舎暮らしにも憧れるってみたいところがあるんですよ。地方にいくとハレを求めてお祭りをやってみたり、誕生会を祝ったり冠婚葬祭が派手になったりとかって言う様な事もあると思うんですけれど、その一つで地方でロケをするとですね、ロケ隊も高揚しますし、凄く色々な一体感をしている現場に出くわすようなことがあったりなんかします。「映画の持つチカラ」って本当にこれからも色々な形で、例えば福島みたいに所に影響を与えていくんじゃないかなって思っていますし、それだけじゃなくてそこをこうフィルターを通して、映画って言うスクリーンとかフィルターを通してですね、我が町が映ることで違った見え方をするって事も多分あるんじゃないか。夢や影響を受けるって事も沢山あると思うんですけれども。

そろそろ時間になってきて、中々まとめにくいんですけれども、最後、

お一方ずつですね、まとめの意見を頂きたいなと思っているんですけども、「家族のカタチ」それから「育つチカラ」それに与える「映画のチカラ」って言う様な形でお話を進めてきたんですけども、冒頭の口火を切っていただいた宮脇先生の方からですね、一連の今のお話を伺って今後のこの映画祭に期待する事も含めてですね、映画とそれから家族・育つチカラについてお話を頂けたらと思います。

宮脇 理さん： 私たちが「みらい」をみる、展望すると云う場合、現在から未来を眺めるのが普通です。しかし、かつてミヒャエル・エンデ (Michael Ende 1929~1995) は、まずはミライから現実を見て、つまり逆引きですね、そして、そこから改めて未来を見ようと云っています。これはエンデがかつて「AERA」の前身「朝日ジャーナル」の廃刊直前(1989.4.14)に、井上ひさしさんとエンデとが対談した時の内容です。その時エンデは「未来から現実をまずは視て、その現実を直視してから未来を見るんだ」という。一呼吸入れています。つまり直進的な未来論じゃなくて、未来とは、こんなんじゃないかなと想定してから今・現在を逆に眺める、その現在から未来を見ていこうという……。ついで反転して「現在をどうしたら良いかということを考える」と云っていた記憶があるんです。「ミライ」を見通す余裕ですね。

ところで子どもに見せたい映画としては、私は誠実な映画・誠実で気概のある映画、これが基本だと思います。一例を挙げるなら静謐に満ちた小栗康平 (1945-) さんの『泥の河』(1981)、いま一つは気概に満ちた『いまを生きる：DEAD POETS SOCIETY』(89.米)。確かピーター・ウィアー監督のもと、若き日のイーサン・ホークが決然と立って衆目の中で正論を謳い上げる映画です。目が覚めるような一瞬、是非とも子どもに観せたい映画です。それから今の二件から飛躍するようですけども、ダイナミックな夢を持つような映画も私は決して否定はしていません。誠実さ、静謐とは矛盾するようですけど、例えば『光と闇の伝説 コリン・マッケンジー』(1996)ですか？、ピーター・ジャクソン監督の作品。まさに評価が別れる作品です。彼が後に作った『ロード・オブ・ザ・リング』(2001)、あの『指輪物語』、『キング・コング』(2005)、この三つの作品を見た時にですね、こういう人の存在と作品世界は前者の健気さだけじゃなくて、子どもの夢を広げる映画、(誠実さ)と、夢の広がりの方を育てて呉れそうだなと思ったものです

渡邊竜一(レター)： ありがとうございます。じゃあ、服部先生お願いします。

服部 敦さん： 今日は大学教授っぽく小難しい事を喋りましたけれども、ここに呼ばれたのはですね、本当は映画が好きだから呼ばれたんですね。学生時代

に年間 4~500 本位見ていたんで、そういう繋がりもあって映画が好きだろって呼ばれたんですけど。

やっぱり映画ってこういう大きな画面を皆で一緒に見るってのがとにかく映画の一番の良さだろって思っています。最近すごく気になっているのが一つあって、一つだけ申し上げようと思っているんですけど、最近子供達の書く字がメチャメチャ小さくなっている。ご存知ですか？凄く小さくなっているんですよ。それがどれ位小さくなっているかというと、本当にミリ単位の 1 ミリ 2 ミリ位の字を書くんですよ。何でかと言うと、いわゆる DS とかゲーム機の文字が大体 2 ミリくらいなんです。あの大きさの字しか書けなくなっている子供がすごく多くなっているんですよ。画面とのコミュニケーションの中で与えられる影響って凄く大きいんだなって最近感じていて、自分の子供も凄く小さい字を書いていたんで「お前、こんな字を書いていたら駄目だぞ」みたいなことを言っているんですけども、そういう意味でもこういうデカイ画面を皆で共有するってということが映画の力で、こういうのは多分色々な活動・色々な繋がりにも力を与えていくんじゃないか。やっぱり映画ってもう一回力として見直していきたいなって力強く思います。

渡邊竜一^{レター}： ありがとうございます。じゃあ生田目さん、映画でも良いですし家族でも良いですし子供でも良いですし、テーマをお願いします。

生田目京子さん： 私が勤務した頃の子供達が大きくなってその子供達が今私が勤めている保育園とかに来ているんですね。だからハッキリ言えば孫を見ているような感じなんですけど、私が育った頃と比べようとは思いませんが、私が勤め始めた頃の子供達と比べても今の子供達は違うなと思うことが沢山あります。でもそれは子供達のせいじゃないんだと思うんですよ。今の保護者、つまり私達の年代の子育てにも問題があったんじゃないかなって非常に思うんです。便利とか簡単とか楽しいって言うのが結構一番になっちゃって、勿論それも大切なんですが、それだけで終わってしまっているっていう部分があるんじゃないかなって思うんです。子供の中に「ママの DS のカバーはキティーちゃんなんだ」なんて言う子がいるんですよ。ママ達が一生懸命 DS をやっているんですよ。そういう風な事が子供達に影響しない訳がないよなって非常に保育現場では思っています。そう言う意味では子育てもそうですが親育ても一緒にしていかなきゃいけないかなって思っています。

渡邊竜一^{レター}： ありがとうございます。じゃあ廣木監督、最後に一言お願いします。

廣木隆一さん： そうですね。映画祭が今回始まって映画祭もずっと続いてほしいんですが、お客さんを育てるって事が最近映画を見るお客さん・観客を、本

当に逆に強制的にじゃないけど子供達と一緒に先生が見てそれについて語ったりっていうのはあるんだなって思います。本当に今情報や見る物がいっぱいあってどれを見ていいか分からない。逆にその映画を見せていくことで色んな感じ方が「面白い」って言う奴もいるし「つまんない」って言う奴もいるって言う事が分かったほうが全然良いし...って言う事で、客も一緒に育てて欲しいって思っていますけどね。

渡邊竜一^{レター}： ありがとうございます。確かにあれですね、映画をどう見るかって凄く重要です。多分バイオレンスな物を見てそのままそれにハマッてしまわれたら困るわけで、やっぱり反面教師として見るのかもしれないし、夢として見るのかもしれないし、是非映画祭の発展と合わせて観客も育ててもらえるととっても有難いなと思います。

最後に家田さん、お願いいたします。

家田 荘子 さん： 今、パソコンで映画が見られるようになってきてしまって個人で見ちゃう、そういう大人や子供が増えてきているんですけども、是非家族や親しい人と誘い合わせて映画を見に行きたくて思います。そうしますと行く途中でお話しも出来ますし、それから映画を見た後に「この映画はどうだった？」って会話も出来ますので、是非映画を見に連れて行ってあげて頂けたらと思います。

渡邊竜一^{レター}： はい、ありがとうございました。

このプログラムですね、第一回目の「福島こどものみらい映画祭」が終了するわけですけども、来年も主催者の方あるんですよね？ 是非映画祭が育っていくとですね、この映画祭に出る事自体もとっても嬉しい事になる。例えば映画が出品される事が映画監督なんかにとっても嬉しい事になってきますよね。続けることそれから影響力をもっていく事が非常に重要な気がします。なので是非今皆さんに言って頂いた通りで参加して頂くそれから見て頂くって事はとっても大事な事のような気がします。と言う意味で言うと、とにかかくにも第一回目が開かれそして終わっていくってことは非常に良い事だと思いますので、是非この映画祭が未永続していくように祈っている次第であります。

皆さん今日は短い時間でしたけれども、どうもありがとうございました。ありがとうございました。